

# 広汎性発達障害のある生徒に対する カウンセリングの実践

—日常生活における問題の克服のための支援—

石原 廣人

## Counseling practice for students with pervasive developmental disorders Support for overcoming their problems in daily lives

Hirohito Ishihara

### 抄 録

発達障害の種類によっては、年齢の上昇と共に症状が軽減するものがあと言われている。また、教育や医療等の指導が適切に行われると症状が軽減するともいわれている。

学校教育と並行して行われることのある教育カウンセリングにそれを助長する効果があれば教師の支援が行えると考え、発達障害のある高校生にカウンセリングを行うことを計画した。実践の結果、彼らの学校生活で課題となる行動に変容が起こるという手応えを得たので、少いケース数であるが報告する。

キーワード：発達障害  
障害 (disorder)  
自閉傾向  
対人関係  
認知

## はじめに

今回、広汎性発達障害のある生徒に対しカウンセリングを行って、対人関係に変容が見られた事例がいくつか観察できたので報告する。広汎性発達障害のある生徒に対するカウンセリングによる指導法は研究の途上で効果の検証が十分行われた手法はあまり多くない。今回報告する手法も同様に妥当性の検証を経ていない。しかし今後広汎性発達障害の指導や支援に努力する人たちの参考になればと考え報告する。

### 1 広汎性発達障害について

医学分野でいわれる広汎性発達障害、行政や教育の分野でいわれる発達障害という用語の示すところはほとんど同じである。本稿では広汎性発達障害という用語を使用する。

ところで代表的医学診断基準 DSM IV-TR には、広汎性発達障害の中核には自閉があると記されている。自閉という症状はいくつかの特徴で説明されている。ただ自閉症として現れる時は人ごとに症状が異なり「自閉症スペクトル」といわれる。

また「広汎性」ということばは、心理的発達の多くの領域が同時に重篤に侵され、そこが臨床上の中核的障害であることを示すためにつけられており、広汎性発達障害と発達障害ということばでは「広汎性」をつける方が状態をよりの確に表現していることになる。

広汎性発達障害のある人たちの多くは、人間関係について理解することが困難で他者とかわることを不得手とする。が、不得手でありながら、他者とかわろうとし、友人を求める場合もある。

このような状況が同時におこることもあるが、これは広汎性発達障害のある人が生活する上の困難を増大させ、周囲にいる家族・友人等にもストレスを与えることがある。その場合学校の中で生活する場合、対人関係が多くなるため困難は大きくなる。

彼らの学校生活を円滑なものにするためには、様々な課題の中から生活の改善につながるものを選び出し、支援やカウンセリングの目標とすることが必要になる。

### 2 面接の目的と方法

今回行う面接の目的は、広汎性発達障害のある生徒が学校生活への適応を容易にするため自閉に特有の問題を改善することを目的に行うこととした。

しかし広汎性発達障害の支援を行うカウンセリング手法が確立しているとはいえないため、当面は被面接者（＝生徒。以後は生徒とよぶ）の関心、認知、思考などについて理解することと、学校生活をおくる上での問題の根本を把握することを目標とした。

面接の方法は折衷的な形態になると予想したが、初期には信頼関係構築のため来談者中心法の基礎的技法（受容、くり返し、明確化、支持、質問）を実施した。

現在、生徒が直面する生活上の課題や症状の軽減を図ることも考慮はしたが、「障

害」自体に直接働きかけることは避けるという方針で面接に臨んだ。

面接実施前には、学校や家庭で生徒が直面している課題、性格、人間関係等の情報を、可能な限り収集した。

### 3 事例

#### 事例 1

##### ① A君 高校3年生 男子

診断：就学後かなり早い時期に広汎性発達障害の診断を受けていた。

##### ② 事前に集めた情報

A君の指導にかかわる教員から生活の状況を聴取し、以下のような情報を得た。

DSMに準拠して複数の観点から症状を聴取したものは以下の通りとなった。備考には学校内において観察される状況や生活上の課題を記載した。

I軸に関連する事項（臨床疾患。臨床的関与の対象となることのある他の状態）

なし

II軸に関連する事項（パーソナリティー障害。精神遅滞）

自分の考えに対するこだわりが強く、説得や説明に対して自説を曲げない。

III軸に関連する事項（一般身体疾患）

なし

IV軸に関連する事項（心理社会的及び環境的問題）

自分の考え方や着想に関心が集まりがちで、人の意見を考慮しようという態度が持てなかった。

自分の明らかな誤りを指摘されても、強弁により考え方を変えようとしなかった。

友人を欲しがるが、自分の態度を変えないため級友から敬遠され孤立し、話し相手は教員だけであっあ。

V軸に関連する事項（機能の全体的評定）

学力はあり成績は学年で上位であった。

生活のリズムに乱れはないが、他人に合わせるために予定を変更するという余裕を持たず、友人と関わり合っていくことが困難だった。

一人でいることに孤独を感じ、友人を求める気持ちは強く、異性の友達も作りたいたいと思っているようであったが、相手に合わせるため自分の気持ちを抑えるという行動はとれないようであった。

備考：学校内での生活

学内で学力は高く、成績は優秀であり授業内容の理解、授業態度に問題は起きていなかった。本人には授業課目に苦手意識を持つものは無く、科目の得意不得

意も意識していなかった。彼の発言から「何でも一生懸命やらなければならない」という信条を持っていることを理解することができた。

学校行事への参加は熱心であった。しかし他の生徒と協力して活動することはなく、教員からは一人で活動することが好きだと見られていた。

本人は親しい友人は2人だと述べていたが、同時に相手はそう感じていないかもしれないとも述べていた。

友人をたくさん増やしたいという気持はないが、数人の友人がいれば満足だと述べていた。

本人によれば部活動は部員が少なく、自分一人で活動する日が多かったとのことであった。練習メニューは自分で立てて実行していたため、他の生徒はかかわってこなかった。

自宅はもちろん、学校の中でも身の回りの整理整頓ができなかった。しかし掃除は熱心に取り組んだ。しかし、友人からは、ちりやほこりは無くなるが片付かないと評価されていた。

忘れ物が多く、家から持ってくるべき物、持ち帰るべき物ともに忘れることが多かった。本人は「忘れてはいけないと思っているのになぜか忘れてしまう」と述べていた。

### ③ 性格

教師から見たA君の性格は生真面目であった。

A君の自己理解を確認するためYG性格検査を行った。

第1回目は全ての間「どちらともいえない」を選択した。その理由を本人はどちらともいえないのでそう回答したと言ったが、検査開始後4分で終了したことから、間を読まずに印をつけたのではないかと考えられた。

第2回目のYG性格検査では図1の結果が得られた。A君を観察した印象と大きな違いはない結果が得られたので、自己理解は客観的なのではないかという印象を受けた。

### ④ 面接の過程

6月×日 (第1回)

インタビュー面接

A君の学校生活、友人関係について聞いた。

A君は無理矢理面接をさせられたので、自分に面接は必要でないことを強調し、「次回は夏休み明けにしたい」という希望を述べた。

7月×日 (第2回)

夏休み前に会いたいとの申し込みがあり面接を実施した。

しかし特別の話題は無く、秋葉原通り魔事件が話題になった。

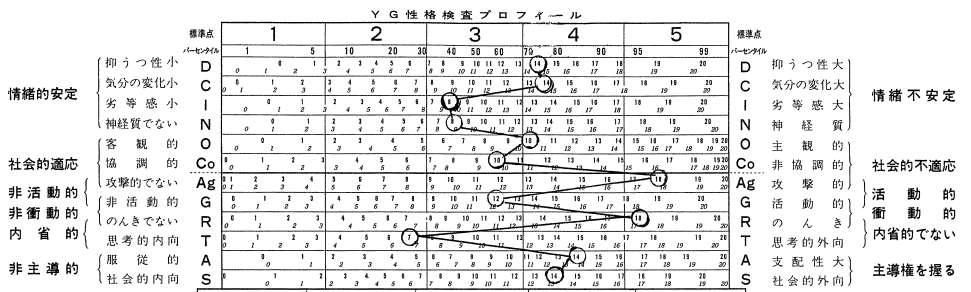


図1 A君のYG性格検査の結果（2回目）

A君から「良くない行動だ」「自分を苦しめる」「なぜあんなことをするのか理解できない」等の発言があった。ここまでA君の主張は納得できる内容であった。

しかし唐突に「死んだ人たちの霊も、立ち直って欲しい、罪を償ってほしい」という発言をしたので、発言の意図を聞くと「死んだ人がかわいそう」という答えであった。

夏休みに何を予定か質問した。答えは「コンビニでアルバイトをしたい」だった。給料は「親に渡したり、外食したい」ということだった。

——第2回 面接後の総括

会話の内容は普通の高校生の発言だった。

話し方に癖と表現するしかない特徴が見られた。

信頼関係を構築するため終始聞き役に徹したので、面接中A君の表情は明るかった。

会話の内容は前後で矛盾するような所はなかった——

8月×日（第3回）

夏休み終了直後に面接した。

アルバイトをしたいと言っていたので、感想を聞くと「面接で断られた」ので毎日学校に来ていたとの答えであった。

「アルバイトができなくて残念だったね」と声をかけると「毎日先生と話したり、部活や進路のことで夏休みは短く感じた」と述べた。

進路について方向が決まったのか聞くと、希望の職種を答えた。「そういう職場ではお酒を飲む機会も多いのでは？」と聞くと「夜更かしは体に良くない。夜は体を休めて寝る方がよい」と突然激高した。語気が荒くなり、口から泡を飛ばし、激しく首を動かし頭を振った。

唐突に「次の面接は10月にして下さい」と言って立ち上がった。

——第3回 面接後の総括

酒ということばに強く反応したのかと考えたが、A君は後に「就寝時間が変わることに耐えられなかった」と述べた。

これまで円滑だった会話が突然の感情の高ぶりで中断したという印象を受けた。

今回A君は激高した。ここまでの面接中、思い通りにならない場面や意に沿わないことはあったので、感情的になりやすいというわけではないように見受けられた。A君は特定の問題で感情が高ぶるが、その表現に違和感を感じた。後に彼の克服しなければならない課題はここにあると思われるようになった。——

10月×日 (第4回)

この日のA君は落ち着かない様子だった。座っていてもそわそわして視線も定まらなかった。

「悩みは、行動するしかない」「夢ばかり考えていられない」「悩みは思っているだけでは解決しない」「悩み。(薄笑いを3回して) 深めることが困難」「具体性が出せない」「そればかり確率が高いので、そっちの低い方は自分の夢を……」「夢の方に落ちて、自分の悪い方は感じている。それだったら受けさせてくれない」等の発言があった。

これらは会話というよりA君が自分に言い聞かせているような印象であった。相手に分からせるという想いはなかったようであった。

——第4回 面接後の総括

面接後分かったが、A君は強く希望した会社の入社試験に落ちていた。

面接の際に聞いたことばは悩んでいるA君の頭の中の思考だったかもしれない。もしそうなら、あの状態では、A君の考え方の整理ができるとか方向が決まるとか気持ちが落ちつくとか言うことは無理かもしれないと感じた。——

10月×日 (第5回)

4回目の面接の1週間後、A君は前回と同様の意味の理解しにくい発言を繰り返した。これに対しカウンセリングの手法の「質問」を用いA君の思考をリードした。

A君「最悪の場合が視野に入れないとだめだと言っている」

カウンセラー (以下 Co)「誰が言っているの?」

A君「先生が」

Co「どんな場合のこと?」

A君「就職試験で」

Co「整理すると?」

A君「就職試験では、最悪の場合のことも考えておかないとだめだと先生が言っていた」

Co「先生がそう言ったんだね。それで君はどう思うの?」

A君「先生は私の夢を切り捨てている」

Co「君の夢？」

発言を整理していった結果「就職試験では最悪の場合も想定した方がよい」と進路指導の先生に言われた。しかし（A君は）まだ会場説明会に参加すれば就職のチャンスがあるのではないかと考えている。その結果を待って就職試験を受ける企業を決めても良いのではないかと考えていることが分かった。

——第5回 面接後の総括

他人に分かりづらいA君の発言は彼の混乱そのものと仮定し、発言内容の混乱を納めることを支援した。落ちつけば考えと気持ちが整理できるのではないかと考えた。発言が分かりやすくなるよう、主語を確認したり、説明を補うよう誘導しながら会話を続けた。

面接の終わりにA君は「もしこの会社がだめでも次のチャンスを狙いたい」という発言をした。情緒的に落ちつき、論理性も増したように感じられた。——

10月×日（第6回）

情緒的に落ちついた会話ができたが、就職活動に進展がないため行動に変化はなかった。

11月×日（第7回）

就職面接の志願票を持参し書き方を教えて欲しいと言い、志願票を書き始めた。理由を聞くと「はっきりしないが、ここで書きたい」という答えだった。

——第7回 面接後の総括

指導開始前A君が、自分の考え方に固執せず、柔軟な考え方をすることができれば、学校での生活がしやすくなるだろうと予想された。

以前の面接で見られた情緒の混乱は、指導の困難をうかがわせ、人間関係、信頼関係の構築もできないように思われた。しかし、障害の無い人に対するカウンセリングと同じ方法で態度の変化がおこったように思われた。——

⑤ A君のケースの考察

A君は自分の思考と情緒の混乱している状況を言葉で表現し、筆者と認識を共有することができた。筆者はその混乱に対してカウンセリングの質問技法を適用し混乱の整理を援助した。A君の生活上の課題「人の意見を聞き入れること」は自閉症を中核とする症状で改善は困難と思われたが、たまたま起こった混乱に対する支援を契機に課題状況に変化を起こせたように思われた。

これは生活の一場面で見られた変化である。他の行動に転移が起きれば効果が認められたことになるが、面接開始時にA君の指導にかかわる教員が行った多軸判断を再度施行したが評価に変化は見られなかった。またA君と関わりのある他の教員に「A

君は変わったか?」と問いかけても、変化があったという認識を持つ者はいなかった。効果があったと判断できる材料は集まらなかった。

しかし、広汎性発達障害生徒の思考の混乱を言語化し、この整理をカウンセリングの手法によって支援し、認知の変容を図るという方法の有効性について検証を進めてもよいのではないかと考えるに至った。

## 事例2

### ① Bさん 高校3年生

最近、広汎性発達障害の診断を受け経過観察中。

### ② 教員から聴取した情報

DSMの多軸診断に準拠した情報

I軸に関連する事項（臨床疾患。臨床的関与の対象となることのある他の状態）

なし

II軸に関連する事項（パーソナリティ障害。精神遅滞）

独善的に行動し関わりのある人の感情や、都合に配慮できない。

異性に対する関心は強いが、相手の気持ちを推測せず自分の想いだけで行動し、法律的問題を引き起こした。

III軸に関連する事項（一般身体疾患）

なし

IV軸に関連する事項（心理社会的及び環境的問題）

異性に対して強い関心を持ち、相手の気持ちや都合などに配慮せず行動したため、友人関係が壊れ、自分が被害者となるいじめなどの問題を引き起こした。

自分の家系に対する自負心、特技、関心に関して虚言と思われる話や誇張した話をして周囲の人の関心を引こうとし、話が破綻して信頼を失う等の行動を繰り返した。

V軸に関連する事項（機能の全体的評定）

高校生として普通に生活していて問題ないように見えるが、対人関係では独断的で相手の気持ちの理解や配慮ができず、友人関係にトラブルを引き起こしていた。

### 備考

日常生活で自分に都合の良い条件を空想し、これを前提にものごとを進め、自らも事実であると思いつく。相手の意向を確かめないため、後に進退に窮する状況が多くあった。

部活動に熱心に取り組み、後輩に対しては良く指導して信頼も厚かった。

異性にたいして、過剰な関心を寄せメール、通話、携帯の掲示板へ書き込み等を行った。この状況が繰り返されたため教員が指導を行ったが、同様の行動が繰



り返された。

態度が変わらないという点は、前述のA君のケースに似ているが、Bさんの場合は人間関係や相手の気持ちに配慮できないことが特徴だと考えられていた。

③ 性格

YG 性格検査を実施し下記のような結果が得られた。

自己理解と、面接の印象は類似していた。

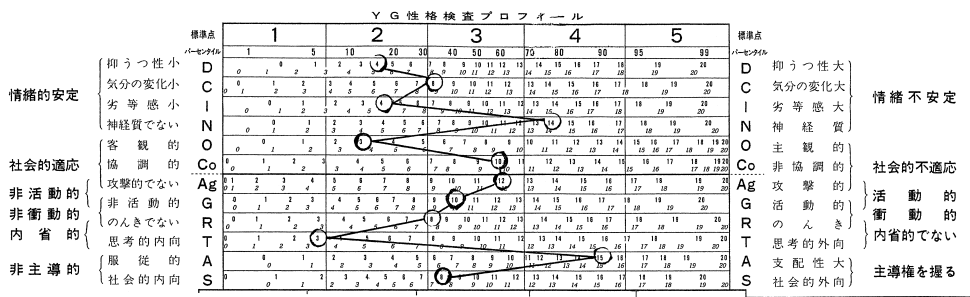


図2 BさんのYG性格検査の結果

④ 面接の過程

6月×日 (第1回)

面接は学校から要請されて実施した。

Bさんは開口一番「心に傷のある男子生徒と交際している。彼を救う方法を教えて欲しい」と述べた。Bさんはその男子生徒の生活状況を大変詳しく知っていた。「なぜそのように詳しく知っているのか」と問いかけると、「協力してくれる級友が同性、異性含めて数人いる」と述べた。

Bさんは自らの生い立ちについても語り、大変悲惨な境遇だと話したが事実ではなかった。……他から得た情報と比べると、誇大な話という印象を受けた。

———第1回 面接後の総括

誇張されていたり作話的ではあったがBさんの話をよく聞いて批判はしなかった。

信頼関係の構築のため受容に徹して聞くことに専念した。———

7月×日 (第2回)

この面接でBさんはまた自分の生育と環境について語った。

進路先や、将来の夢、家庭などについて語った。

また自分の優れた運動能力について語ったが、実際の能力は普通であった。次にBさんは彼に対する思いを語った。前回は彼を支えたいという趣旨の発言だったが、今回はBさんに関心を持たない彼に対する嫌がらせについて語った。

——第2回 面接後の総括

第1回の面接と2回の面接で、彼に対する発言内容が、大きく違うことについて聞いてみた。Bさんは「事実と希望が混じっている」と述べ、「話していると区別がつかなくなる」と補足した。——

7月×日 (第3回)

面接に慣れてきたためか、いろいろな話題について話してくれた。

「彼が去って行った悔しさを忘れるため電子掲示板に嫌がらせを書き込んだ」「このことで彼とトラブルになったが、彼は戻って来ると信じている」

——第3回 面接後の総括

Bさんは友人関係でどのような行動をとるべきかという基準が理解できていなかったようであった。「彼が嫌がることをしてしまった時、謝っても許してくれなかったらどうする?」という問には答えられなかった。

自分のとった行動で相手が傷ついて、その後は人間関係を修復できないだろうということが理解できなかった。

Bさんの場合は他人の考えを想像できないことが様々な困難の原因になっており、この克服が課題であろうと思われた——

この後13回ほどの面接を行った。

しかしBさんの抱える「人間関係について理解できない」状況に変化はなかった。

その改善のため相手の気持ちを理解する目的でロールプレイを行った。

ここでBさんは他者の役割を演技することができず、ことばを発することができたのは自分の気持ちを吐露する場面だけであった。

3回目はBさんのロールプレイが進歩したという印象を受けた。

これまでできなかった他者になっての発言がおこなえた。Bさんは自分のつき合っている彼の発言として次のようなことを述べた。

「おまえは、俺の気持ちが分からない。勝手に決めて、勝手にやってしまう。俺のことなんかどうでもいいみたいだ。つき合っているなら、そういうところは相談するところだろう……」

これまでできなかったことが突然できたので、Bさんにうまくできた理由を尋ねると、テレビドラマで同じような話を見たとのことであった。自分で考えたのではなく受け売りだったのだが、本人は「もしかしたら、彼は私のことが嫌いかもしれない」と感想を述べていた。

自分で考えた内容ではなかったが彼の気持ちについて洞察を得られたようであった。

⑤ 本事例の考察

一般に相手の立場にたって演技することは、容易ではないにしても、誰にでもできることのように思われる。しかし人間関係の中で彼我を区別して理解できないBさんには困難であった。自分の考えは分かるが、彼がどう考えるかを想像することは難しいことであった。

正統的なロールプレイを実行しようすると、役柄を変えた時、演技はできなかった。それがなぜ一人で行った時うまくできるようになったか、Bさんには説明することができなかった。

筆者にも、どうしてBさんが相手の立場になるという想像ができるようになったか説明することはできなかった。ただ、ロールプレイを実践した結果、Bさんが相手の気持ちを想像できるようになったことを経験しただけである。

この経験を元にカウンセリングが広汎性発達障害の指導に有効であるなどと結論づけることはできない。ただ、やってみると「分かる」「変わる」可能性があるとはいえるように思われた。

## 5 面接援結果の総括と今後の課題

広汎性発達障害の生徒と面接し、彼らの持つ課題を解消するために心理臨床の立場から支援を行った。その中で、偶然であったり工夫の結果であったが、改善につながる方法を見出すことができたように思われる。

重篤な自閉症では相互的対人関係やこだわりの変容は困難であるが、広汎性発達障害の一部にはカウンセリングの手法によって状態を改善しうることがあるという事例を見ることができた……これが成果であるように思われる。

しかし広汎性発達障害の状態像は多様で、支援方法に一般性があるかどうかの検証を行う必要がある。次の機会には複数の事例に適応した結果を検証し指導法の有効性が確認したいと考えている。

〈付記〉個人情報保護のため、事例の記述はその本質を損なわない範囲で修正を加えてあることをお断りします。

## 参考文献

---

- 1) 小林隆児：発達障害における「発達」について考える そだちの科学 日本評論社 No 52-8 2005
- 2) 国立特殊教育総合研究所：高機能自閉症の子どもの指導ガイド 東洋館出版社 2005
- 3) 森孝一：LD・ADHD 特別支援マニュアル 明治図書 2003
- 4) 牟田悦子：LD・ADHD の理解と支援 有斐閣 2005
- 5) 中根充文ほか：ICD-10 「精神・行動の障害」マニュアル 医学書院 2003
- 6) 杉山登志郎ほか：高機能広汎性発達障害 プレーン出版 2002
- 7) 特別支援教育のあり方に関する調査研究協力者会議：今後の特別支援教育のあり方について（最終報告） 文部科学省 2003
- 8) 上野一彦ほか：軽度発達障害の心理アセスメント 日本文化科学社 2005
- 9) 氏原 寛ほか：心理臨床大辞典 培風館 2006
- 10) 融道夫ほか監訳 ICD-10 精神及び行動の障害 臨床記述と診断のガイドライン 医学書院 1994

## Abstract

In some developmental disorders, related symptoms are said to be reduced as children grow. Appropriate in education as well as in medicine are believed to contribute to the reduction of such symptoms. Educational counseling is often provided along with other various educational services. If the counseling is effective way to reduce the symptoms of developmental disorder, it would be able to support school education. Based on such belief, this research has been conducted.

Key Words : Developmental disorders  
disorder  
autistic tendencies  
interpersonal relationship